

Essay

Sapiarc.com

2013年1月16日(2013-1)

思い出すことなど

年始は忙しいものだが、今年の初めは、私にとってとくに忙しく、あっという間に1月も半ばを過ぎてしまった。忙しかった原因のひとつは、2台使っているパソコンの両方に問題があり、それをどうにかしようとして、協力してくれた埼玉大学の院生と一緒に長時間パソコンに張り付いていたからだ。それはそれとして、年始にはいろいろと考えさせられることも多い。

年賀状とともに、知人の訃報が届くことがある。年末に亡くなられた場合、そうなることは止むを得ないのだが、普通よりも重く感じられる。30年ほど前までいろいろお世話になった中村清さんが、昨年12月26日に88歳で安らかに亡くなられたことを、真理子夫人とご次男の望氏が連名で送ってこられたお葉書で知った。

私よりも一回り以上年上の中村さんは、太平洋戦争が終わって1年か2年後に、九州大学理学部化学科（当時はまだ九州帝国大学）を卒業され、大日本製薬株式会社（現在は大日本住友製薬株式会社）に入社された。昭和30年ごろ、会社から派遣されて、私の出身研究室である東大・水島(三一郎)研究室に国内留学をされた。つまり、中村さんは、私にとっては普通の意味での大学の先輩ではなく、研究室の先輩なのだ。

私は、中村さんと同じ時期に研究室にいたことはないが、水島研究室を引き継いだ形の島内(武彦)研究室にもときどきお見えになっていたもので、自然に知り合うことになった。しかし、研究について何らかの関係があったというわけ

ではない。友人というには年が違い過ぎる中村さんと親しくなったのは、ひとえに中村さんが穏やかで親しみやすい性格の方だったからだ。

中村さんは、私が昭和40年（1965年）に初めてアメリカの地を踏んだときの記憶と結びついている方でもある。というのは、私と家内が1965年8月26日にサンフランシスコ空港に着いたとき、出迎えてくださったのが中村さんと奥さんだったのだ。まだ幼かったお嬢さんも一緒だった。これは、私が中村さんに頼みこんだわけではなく、中村さんの方から出迎えてあげるといふ連絡をいただいていたのだ。当時、海外との連絡はもちろん航空便によっていた。私は、研究上の関係で知り合っていた Bob Snyder 氏（当時、Berkeley に近い Emeryville にあった Shell Development Company の研究員だった）からも出迎えるという手紙をもらったが、それよりも前に中村さんからお手紙をもらっていたので、Snyder 氏には断り状を送った記憶がある（Snyder 氏は2006年に亡くなった）。

このとき、中村さんは、会社から派遣されて、大学の研究室で研究されていたはずだが、不覚にも私はその研究室がどこにあったかを憶えていない。多分カリフォルニア大学サンフランシスコ校だったのではないかと思う。ここは医学・薬学が中心の大学だ。

私たちが、SFO 空港に着いたときは夕方、その日はサンフランシスコ市の中心部にある Sheraton Palace Hotel に連れて行っていただいた。このホテルは良いホテルだった。今から

10年ほど前に一度行って見たが、当時と余り変わっていなかった。翌日の午後、また中村さんの車で、スタンフォード大学に行った。El Camino Real という名前の道路で行ったが、これはスペイン語で国道という意味だ。かつてカリフォルニアはメキシコ領だったから、今でもスペイン語の地名が多い。私には、これも目新しいことだった。

スタンフォード大学のキャンパスは広大なもので、とても美しかった。まず東大で1年先輩の安部明廣さんに会いに行った。安部さんは、学部を卒業して、昭和電工(株)に入社したが、当時は Paul Flory 教授の研究室に留学中だったので、この研究室を見学させてもらった。当時の東大の研究室とは比べものにならないぐらい、整頓されていて、きれいな研究室だった。

この日、私は Flory 教授には会わなかったと思う。Flory 教授は高分子物理化学のリーダーで、この時より9年後の1974年にノーベル化学賞を受賞された。その後、Flory 教授が来日されたとき、私は彼と食事をしながら話したことがある。安部さんも一緒だった。安部さんは、帰国後数年を経てから、東工大工学部教授になられた。最近もときどき会うことがある。

当時、スタンフォード大学には、Flory 以外にも、John Baldeschwieler (物理化学), Carl Djerassi (生物有機化学), Harden McConnell (生物物理化学), Henry Taube (無機化学, 1983年ノーベル化学賞受賞者)らの有名教授がきら星のごとく居た。これらの研究室に来ていた日本人研究者も多く、清水博氏(のちに東大薬学部教授)、大西俊一氏(のちに京大理学部教授)らにも会った。安部さんの車で、広いキャンパスを案内してもらい、彼のお宅も訪問し、正子夫人からアイスクリームやアイスティーをいただいた。スタンフォード大学のある Palo Alto の辺りは、夏の間とくに乾燥しているので、とても美味しかった。

中村さんの車で、夕方サンフランシスコに戻ったが、このときは、太平洋に沿った低い山並みの上の道を走ったので、西側に太平洋、東側

にサンフランシスコ湾が内陸に入り込んでいる部分を見渡すことができた。

その後、私は何度かスタンフォード大学を訪問したが、最後に行ったのは2008年1月だ。この時は、埼玉大学の国際交流関係の業務のために、埼玉大学の職員2名と同行した。この訪問が成果を挙げたとは言えないが、スタンフォード大学の広々として美しいキャンパスに改めて感銘を受けた。

私が、中村さんに最後に会ったのは、もう30年以上前のことだ。大日本製薬が新しい研究所を地下鉄御堂筋線江坂駅(吹田市)の近くに建てた直後に、私はこの研究所を訪問した。中村さんは当時この研究所の幹部だったはずだが、普通の研究員と同じように仕事をしておられた。少々驚くと同時に、研究熱心だった中村さんらしいと感心した。

中村さんとのペアのような形で、私がよく思い出すのは松井芳樹さんだ。松井さんは、塩野義製薬(株)の研究所に永く勤務されたので、中村さんとはコンペティターだったわけだが、このお2人の間に特別な関係があったとは聞いたことはない。

松井さんは、中村さんより数年年下で、太平洋戦争が終わったとき、海軍兵学校に在学中だった。戦後、大阪大学理学部化学科を卒業されて、塩野義製薬(株)に入社され、定年まで勤められた。その後、残念なことに比較的若くて亡くなられた。

私が、松井さんと親しくなったのは、私と同じ時期にミシガン大学に滞在されていたからだ。松井さんは、化学科の R. C. Taylor 教授の研究室で研究されていた。私は物理学科の Sam Krimm 教授の研究室にいたので、距離的には少し離れていたが、よく会っていた。松井さんは多分2年間滞在されたので、1年間滞在した私よりも早くから来て、遅くまでおられた。

松井さんは、はじめ単身で来ておられたが、後になって敬子夫人も来られた。松井さんは運転免許を持っておられなかったので、夫人が来

られるまでに、運転の練習をされた。ミシガン大学のある Ann Arbor には、運転教習のための特別な施設はなく、はじめから路上で練習する。30 歳代半ばになっておられた松井さんは一生懸命に練習して、免許証を取られた。私は、東京で国際免許証を取得してから行っており、ミシガン州では 1 年間程度なら国際免許証で運転できたので、ミシガン州の免許証は取らなかった。

ずっとあとになってから、私は豊中市の松井さんのご自宅に一晩泊めていただいたことがある。松井さんは、本当に学問好きな方で、自宅でも勉強に打ち込んでおられたようだ。敬子夫人によれば、「趣味は学問」と言われていたそうだ。そのとおりで、松井さんは、亡くなる直前まで研究論文を出しておられた。

中村さんと松井さんは、どちらも会社勤務の方だったが、学問好きで研究熱心な点は共通していた。また、性格的には控え目で、社内での昇進にこだわることもなかったように見受けられた。こういうタイプの人たちが、かつてはどの会社にも居て、それがその会社の底力になっていたと思う。逆に言うと、会社にそれだけの余裕があったのかもしれない。考えさせられることである。（おわり）